要旨

1. 本研究の目的と問題意識

本研究では、漢服運動と現在の中国都市の民俗生活との関係を考察する。考察の理由として、民族衣装を復興しようとすることには、主観的要素としての動機と客観的要素としての社会環境や、文化を伝播する媒介も必要となる体と考える。漢服運動は、それが行われる背景と目的によって、民族意識に基づく社会運動と評価されていることが分かる。肯定的な意味合いおいては、漢服運動は、中国のグローバル化と多民族国家という背景下での一種の文化的アイデンティティ・民族的アイデンティティ・文化への自覚であり、漢民族文化への復興運動だと考えられる。否定的な意味合いにおいては、漢服運動にかかわる一部の言論は、民族団結を脅かし、ナショナリズムによる危険性が懸念される。これにより、漢服運動の成因及び実践活動に関して、大部分の研究者は実践者たちを一つの全体的な集団と見なして考察し、民族意識やナショナリズムの部分に注目するようにしている。しかし、漢服運動を養う土壌としての中国における社会環境、及び、このような環境下における実践者個々人の生活のニーズに着目するものがほとんどいないことから、この点につき、本論で着目したいと考える。

初めに、この数年間のフィールドワークを通じて、漢服運動は通俗化・娯楽化の傾向が目立つことが窺える。これは、漢服のマーケティングにおける消費者数、売上金額、販売数に基づく各データの数字からは大きな増加が確認することができる。加えて、その他の商業領域やカルチャー・コミュニティからの資本・資源や、愛好者も漢服運動に加入し始めており、かつての漢服運動の実践者と共に漢服文化を広めるようにしていのである。これによって、従来の漢服にある神聖感と漢服運動における大きな物語のような実践特徴が徐々に瓦解されてきている。そのほか、フィールドワークから漢服運動の実践者を一人一人の個人として考察すれば、「漢服を着る」ことは、単なる彼らの衣生活の一部に過ぎず、漢服は彼らのそれぞれの生活において、意義も機能も多様であることが分かる。ダン・ベン・エイモスは、コミュニティ内部による芸術的交流こそが民俗であると指摘している。そして、周星はダン・ベン・エイモスの観点に基づいて、「漢服圏」における文化実践も現代民俗学の研究範囲に組み入れることが可能であると主張している。

漢服運動が行われてからすでに 20 年余りが経過しているが、1995 年後生まれた若者については、もはやこれらのものたちが現在の漢服運動の主な実践メンバーになっている。世代交代、及び、インターネットによる社会変革という二重の背景下において、漢服運動にも新たな動向が出現してきた。筆者はフィールドワークを通じて、現在の漢服運動の実践は、主に二つの側面から行われていると考える。一つ目の側面は、歴史を遡り、もっとも「真正」な「過去」を追求することである。二つ目の側面は、追求された歴史的素材・要素を再生産することで、現代の民俗を構築することである。この二つの実践形式に対して、今までの漢服運動の研究は、前者に注目が集まることは多いが、後者、特に、実践者による民俗再生産・構築への自発性の部分は、これまで考察されていないと考えられる。ここで、漢服運動に関わる「真正性」と「構築性」は依然として避けられない問題点であることが窺える。この問題点に対して、学者や一般の民衆に関わらず、いずれもそれぞれに見解を持っている。その中には、漢服運動による意義や漢服が表している美しさを賞賛する声が多く見受けられるが、漢服運動による漢服文化は本当の「伝統」、あるいは「民俗」ではなく、捏造された「ニセモノ」だという所見も少なくない。

本論では、2019 年から行われてきた漢服運動の活動を考察し、新たな視点から漢服運

動を明らかにすることにする。さらに言うと、本論には主に三つの視点がある。一つ目の視点は、漢服運動の研究に新たな考察視点を提起し、筆者独自の所見で漢服運動を明らかにすることである。周星教授の指導により、民俗学の研究に関しては、「研究対象をはっきり明らかにすること」と「他人が明らかにした研究対象を新たな視点からもう一度明らかにすること」が重要なポイントであることが示唆される。これにより、本論は、漢服運動に関する「ほんもの/にせもの」に対して価値判断を行うわけではなく、「ほんもの/にせもの」をめぐって生じた民俗現象を糸口として、漢服運動の実践的特徴、及び、漢服運動と現代中国都市の若者の民俗生活との密接な関係を明らかにするのである。なぜなら、漢服運動の成長、及び、その民俗的意義への再考察を通じて、現代中国の若い世代の特徴や中国社会における経済的・文化的ニーズを明らかにすることが可能であると考えるからである。二つ目の視点は、オンライン調査を含めたフィールドワークで得た情報や素材を整理し、新たな一次資料として、漢服運動の研究資料に補足をすることである。本論では、周星教授の研究方法を引き継き、フィールドワークに基づく一次資料を主な情報として漢服運動の研究を行うこととする。このような研究方法は実際には、今までの漢服運動研究に多く見られないのである。ところが、本論での調査に基づく資料には、周星教授の研究と異なる点が三つある。まず、現在の漢服運動の実践者は主に 10 代後半から 30 代にわたる女性であることから、筆者は調査を行う大部分において、実践者と同じ世代の女性の漢服愛好者として、彼らと共に漢服を着ながらイベントに参加することが可能である点である。これにより、筆者は長期にわたって漢服運動に馴染むことができ、実践者の行動の裏側にある意識や動機を深く考察・理解することが可能になる。それと同時に、イベントに参加する実践者が筆者のことを一般の参加者、すなわち「仲間」とみなしてくれることで、筆者は彼らの自然な様子を考察することが可能になる。次に、筆者が収集したのは、目下で行われている漢服運動の資料である。特に、今回のフィールドワークでは、周星教授による情報・内容の上に、新たな考察を追加した。例えば、周星教授は漢服運動の先駆者に対してフォローアップを行ったが、今回、筆者は 2018 年以降の漢服運動において活躍している新たな「漢服運動のリーダー」に対してフォローアップを行った。なお、筆者がフォローアップした無錫の漢服団体である「漢新社」は、以前周星教授の調査対象であったが、当時の「漢新社」と比べれば、現在は、メンバーも、運営方針も大きく変化している。三つ目は、本論での考察と論述が、考現学の意識と結合すことである。本論では、今回のフィールドワークに基づく一次資料を写真と文字の形式で表現し、特に、活動情況、現場の様子、服装コーディネート、実践者の活動理念と探究心に対して、できる限り細部までスケッチをするようにする。概して言えば、上記の視点により、これからの漢服運動研究に尽力して貢献したいと考える。

2. 本研究の構成

本稿では、都市の若者による漢服運動という新しい民俗と生活革命の下での中国都市文化生活との関係を明らかにすることを目的とする。そのため、本稿では、フォークロリズムと生活革命という二つの視点から考察及び分析を行うこととする。フォークロリズムの視点を通じて、主に漢服運動による古代漢民族の服飾民俗への構築及び再利用のことを考察できると考える。その中には、漢服運動の実践者による民族文化へのロマン主義や、中断されていた古代民俗を意図的に復興させること、及び、国家による文化・経済政策の影響下での商業現象も含まれている。そして、生活革命の視点を通じて、漢服運動を

「民族的意識」という狭い文脈から取り出し、社会全体の環境及び中国都市における諸現象のコンテクストの中に置いて考察することとする。この目的は、漢服運動の現代都市生活における現実的な意義、及び、漢服文化がほかの都市文化と交じり合っていく中で、新たな若者文化が生じるというプロセスを理解することである。以上の考えにより、本論では、まず、漢服運動の活動による民俗現象を描写することとする。つまり、考現学の意識を持ちながら、漢服運動による活動の状況を文字でスケッチしたり、写真を付けたりすることで、直ちに漢服運動の状況を表現することである。そして、生活革命という社会全体の環境による諸民俗事象と結合して、漢服運動によるフォークロリズム現象を分析することとする。なお、章と章の関連性について、まず、第一章は、研究対象の基本概要を論述することとする。次に、第二、三、四章においては、それぞれの「人物」、「出来事」/「内部による活動」、「外部と関わる活動」という異なる角度から考察・分析することとする。その中で、第二章は「人」/「内部による活動」を考察対象にし、漢服運動の実践者がどのような自分を構築したいのか、これらの構築プロセスの中でどのような活動をしたのかを明らかにすることとする。第三章は「出来事」/「内部による活動」を考察対象にし、漢服運動の実践者がいかに漢服による民俗生活を構築するのかを明らかにすることとする。第四章は、「出来事」と「外部と関わる活動」を考察対象にし、商業化を社会背景として、漢服運動がいかに外部との交流、外部からの影響及び促進の下で成長・変化していくのかを明らかにすることとする。最後に、終わりは本論の結論とする。

具体的には以下の通りに述べることとする：

第一章では、漢服運動の勃興や発展、漢服/漢服運動の実践者/漢服文化の流派の分類について述べることとする。その中において、第一節では、漢服運動を「萌芽期」、「勃興期」、「停滞期」、「回復期」、「繁栄期」という五つの段階に分類し、そして、漢服運動の各発展段階の状況、重要な出来事や代表的な人物をまとめることとする。第二節では、漢服運動の実践者の分類を行う。現在の漢服運動に、活躍している実践者は、全員漢服を復興しようとする目的で活動するわけではなくなってきたのである。これにより、筆者は漢服運動への集団アイデンティティ、参与性、信念感、及び、実践目的・理念などに基づいて、漢服運動の実践者の分類を行うこととする。このような分類を行うことで、漢服運動における多様で複雑な現象が分かりやすくなると考える。第三節は、「漢服」の定義に関することである。漢服運動の実践者においては、実践目的、実践理念など、それに漢服に対する好みもそれぞれであることから、漢服運動内部ではたくさんの流派が派生されてきた。そして、流派ごとにより、「漢服」であるか否かを判断する基準も異なっているのである。一方、漢服運動外部の者たちも、「漢服」に対して、それぞれに独自の理解を持っている。したがって、これらの者たちが思っている「漢服」は、漢服運動内部の者たちが思っている「漢服」と一致しない場合もあるのである。なお、「漢服」は新しく構築された概念であることから、「漢服」に関する共通の知識は、実際には、今でも統一されていない状況である。さらに、かつての漢服運動が実践した一部の「漢服」は、現在の漢服運動においては、すでに「漢服」とされなくなったのである。本章では、漢服運動内/外部及び各漢服流派がそれぞれに主張している「漢服」の定義について分類及び説明を行うこととする。

第二章では、漢服運動とインターネットとの関係を結合して、「人設」というインターネット世界における人物キャラクターの概念を導入し、「人物」という角度から漢服運動の実践を明らかにすることとする。なぜなら、漢服運動の実践者は漢服文化の伝承母体であることから、漢服運動の実践者の特徴は漢服運動の実践様態に直接影響すると考えるからである。インターネットの普及に伴い、インターネットでの社交は現在の若者の重要な社交方式の一つになっている。インターネットで自分なりの「人設」を構築することも、

今の若者による自己表現の方法になっている。本章では、「大明貴婦」、「漢服コレクター」、「都市プチブル」、「漢服仙女」、「英雄主義」、「伝服人」、「漢服同袍」、「漢服袍子」などの多様な漢服による「人設」の群像、及び、彼らの実践活動を描写することとする。これらの現象を通じて、現在の漢服文化が娯楽化、通俗化の傾向を成していることを明らかにすることとする。そして、生活革命下での中間階級による誇示的消費、生活様式の消費、及び、Z 世代による小衆服飾愛好、二次元文化、青年サブカルチャー思潮などの文化現象の中で、このような漢服運動の現状を考察していく。最後に、伝承母体の世代交代によって変化された文化コンテクストによる消費、展示、文化の混合、置き換えなどのフォークロリズム現象を分析することとする。

第三章では、「漢洋折衷」流派を例として、目下の漢服運動が古代漢民族服飾の残存物及び断片的な記号を再加工・再構築し、これによって新しく創造された文化を現代の民俗生活に活かせるという一連の実践活動を描写することとする。漢服運動は、それが行われた当初から、漢服を現代生活に溶け込ませようとする解決策を模索してきた。この解決策を模索していく中で、日本の着物伝承の経験を参考対象にしている。当初効果が現れたのは漢服の美しさへの構築である。これを踏まえて、さらに TPO、装飾機能、及び現代的なヘアメイクに関する部分も注意され始めた。その中で、「漢洋折衷」流派はまさしく日本の着物を参考にした典型例の一つだと言っていい。明制漢服を中心として実践する「漢洋折衷」流派は、本質的な民俗主体を重視している一方、西洋的・現代的な要素も積極に吸収している。また、「衣食住行」を網羅した民俗体系を結合して、「漢服で暮らす」という漢民族なりの都市民俗の景観絵を描こうとしているのである。それと同時に、こうした漢服民俗スタイルの時代性を合理化するために、「漢洋折衷」流派は「たとえ清朝がない場合、明朝が直接現代とつながれば、漢服はこのように変化してくるかもしれない…」という歴史への空想を示した。なお、多様な文化様相を混合させ、それに伝統文化をファッション性があるシンボルにプロデュースすることは、現在の中国の若者の審美ニーズに応えていると考える。「漢洋折衷」を潮流とした現在の漢服運動において、漢服文化を都市民俗で活かしていく中で、歴史を再編すること、文化を混合させること、文化的要素を置き換えることや、文化をプロデュースすることというような一連のフォークロリズム現象も生じてきた。これらのフォークロリズム現象は、まさに「西洋プチブル」の影響を受けた現在の中国若者による生活への浪漫主義と芸術的な生活様式だと言っていいだろう。

第四章では、商業のコンテクストにおける漢服運動を考察すると考える。漢服運動が行われた当初、漢服は商品の属性をほぼ持っていなかった。その理由は、まず、その時の漢服運動が純粋な文化運動であることで、民族的信念感により、金銭や商業に対して孤高を標榜するようにしていたからである。一方、当時は、漢服運動の実践者の人数が極めて少ないことで、マーケティング対象がほとんどいなかったのである。しかしながら、中国のネット通販の発展及び漢服運動の実践者人数の増加に伴って、漢服の商業化も進んできた。漢服の商業化は、まず、漢服運動の発展に大きく影響を与えた。その中では、漢服の形制、織造工芸、流行を中心としての漢服の「美しさ」への構築、及び、漢服のブランド化による「商家ファン」文化、「山正之争」文化、漢服「アイドル作り」などの文化の形成が典型的である。そして、漢服の商業化により、漢服は「サブカルチャー」から中国文化政策と経済政策による人気の文化資源になっている。その中で、地方創生を目的としての観光資源と「国風」、「国貨」を促進する目標としての「国潮」経済が典型例だと考える。また、「商業」、特に観光産業、民俗文化産業は、そもそもフォークロリズムにおけるもっとも注目される部分であろう。したがって、商業のコンテクストにおける漢服の実践活動も、漢服運動のもっとも典型的なフォークロリズムの部分だと考える。

第五章では、以上の議論を踏まえて、漢服運動におけるフォークロリズムと現在の中国生活革命下での都市の若者の特徴や生活様式との関係を明らかにする。

3. 本研究の結論

本研究は、主に以下のような結論に至っている。

まず、漢服運動における漢服文化は「新しいコンテクストで再構築された民俗文化」だと考えられ、漢服運動におけるフォークロリズムは、古代漢民族の服飾の残存物、及び、服飾に関する物語、技術、情緒、要素、飾り物などの文化的部品が、工業化・商業化した現代中国における文化、経済、社会背景などの新たなコンテクストにおかれて再構築され、新しい機能として利用・消費される現象だと考えられる。

次に、漢服運動の実践者による実践意図から見れば、漢服運動におけるフォークロリズムは、意図的に伝統・民俗文化を都会性・ファッション性があり、浪漫的な商品・鑑賞物に構築することは、現在の漢服運動による実践活動の特徴であると考えられる。ところが、河野眞は、フォークロリズムが生活の隅々まで行き届いていると明らかにした。したがって、伝統・民俗文化を浪漫化として構築するというフォークロリズムは、漢服運動ならではの特徴ではなく、現在、多くの民俗活動、文化産業においても普遍的な現象だと考えられる。

最後に、中国で行われている生活革命、つまり、中国社会全体の環境から見れば、漢服運動におけるフォークロリズムは、現代中国の都市に住んでいる若者の生活様式が多様化になった産物だと考えられる。さらに言うと、生活革命という背景下における漢服運動は、若者が多様な生活様式を求めるニーズに応えたのである。具体的には、衣生活多様化へのニーズ、娯楽の多様化へのニーズと消費の多様化へのニーズに応えたと考えられる。